

学習力を育める作文指導法への挑戦

—自分史を通して—

田中薫 (とよなか JSL)

1. 指導の場では

日本語が不自由な間遊び暮らし、勉強への興味を失っていたり、周囲と馴染めず自尊心が傷つけられ卑屈になっていたりする子どもや、日本語と母語のどちらでも教科学習に取り組めていなかった子どももいた。日本語教室は90分ずつ週3回、1年から1年半で学習理解に近づくことを目標として指導してきた。市民グループが指導に当たり、そうした予定期間を超えてもなかなか前進しない子ども達の、日本語力や学習意欲を改善するため研鑽を続けてきた。

2. 実践の目的と、挑戦の過程

作文で得られる学習力とは、子どもの内面に迫り本来持つ積極的な表現を可能にすることで、前向きな学習姿勢を引き出すことにある。当初、高校の入試対策として始めた自分史の指導後、それまでうまく話せなかった生徒の姿勢が伸び、雄弁に語ろうとし始める変化に、日本語への自信を持たせる効果を認めた。他の年齢の子どもにも応用できるのではと、この指導が必要な小学高学年児童にも自分史で自己を見つめ直す機会を持たせてみた。残虐な言葉を連発し、難題には投げ遣りなある小学生の場合、日本での交友のあり方で対立していた親への不満が自分史作文の中に出てきた。それを詳しく書き切ることですっきりしたのか、素直な態度に変容し、友達関係が一気に好転した。これまでの取り組みで作文と学習力との関係は図1のように考えられた。

学習力の素	学習力が育っていない原因	学習力を育むために必要なこと	指導の手立て
自信獲得から学習意欲へ	書くことに慣れていない	かな・漢字に慣れる、文を書き慣れる	日記で書き慣れる
	日本語力が伸びない	繰り返す間違いを自覚する	添削で課題発見
	話す自信がない	暗誦し、長文を話す機会を持つ	自分史で文に慣れる
	聞く力が不足	長文を聞き慣れる	課題作文で
自己発見から自己実現へ	文が組み立てられない	文の構成を理解する	課題作文で
	学習に関心が薄い	なぜ学習するのか自己目標を持つ	自分史で己を知る
	克服すべき課題が見えない	伸ばせる点・克服すべき点を明確にする	自分史で己を知る
	自分の学習目標を持ってない	なぜ学習するのか・何を学習するのか	自分史で課題を知る
	不満がなくなる	自分を知り、不満の原因を知る	自分史で浄化

図1

3. 作文指導の流れ

指導の流れは概ね図2に示す通りで、特に効果があった事柄は②⑤⑥だと言えた。必要時間は子どもと指導者の力量で一定ではないが、②⑤⑥の導入は、進歩が遅いことへの長い悩みのトンネルから抜け出る時短効果があった。

4. 日記指導と作文分析

形容詞と動詞の敬体・過去形の肯定「いつ・どこ」を表す言葉を学習後、早期に200字帳で日記とその清書指導を開始した。当初助言がな

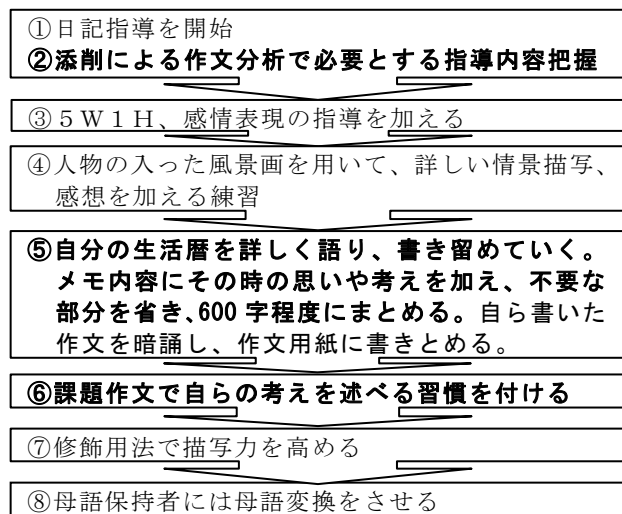


図2

ければ、起きてから寝るまでを順を追って書き出す子どもが多かった。初期の日記指導で、その日の学校生活を順に話させ、一番印象深かった部分を切り取って書くように、その部分を詳しく尋ね助言すると、以降の日記にも周辺の様子や心情に触れられるようになった。

日記・作文で学習力を高めるのに必要なことは、その段階に応じた添削や間違いやすい文型の説明を加えることだが、指導初心者にはこれが難しい。子どもは学習した文型より深い内容を書こうとして、例えば「寝るときか座るときか小さい犬がかわいいです。」のような文になる。主語・読点・助詞・形容詞・動詞の活用など、何から指導し直すべきか、指導者自身の感性で校正した文を書き出し、子どもの文との違いを分析することがその解決に大いに役立った。

5. 自分史

自分史は3～4回、時間をかけてじっくりと聞くことで始める。子どもがどんな生活で何を感じ取ってきたか、どんな目標に導けるかを探るために、年齢を追って思い出話を聞き、書き取らせるという方法を繰り返す。指導者もメモを取りながら、子どもにとっての心の要点を探る。

600字程度にまとめ、日本語の向上に意欲の低い子どもには、暗誦させ、覚えた長文を書き留めて日本語文の特徴を掴めるようにすると、話す・書くことへの抵抗を減らし自信をつけられた。

5.1. 作成の要点

自分史作成上必要だったことは、単に経験内容の羅列ではなく、コミュニケーションを図り、子どもが興味を持っていたことに加え、辛かったことや嫌だったことなど、人に話せなかったことも聞き出すことが大切であった。いじめられた経験を話す子ども、笑われたことを苦にしていたり、そんなことで悩んでいたのかという些細な勘違い、遊ぶことだけが人生の子どももあった。

心の表現から学習が遅れている子どもは自身の考え方や気持ちを表せず、人に理解されにくいために会話の機会を失っていた。特に、自己の失敗を語ることを嫌がる子どもが多く、それを表現に結び付けるには、表情のある絵などで、簡単な喜怒哀楽の表現や、他者の事としてその原因を客観的に柔軟に話す楽しみを増やす事前の指導が効果を上げることが分かった。自分の思いをここでは話せると言う気持ちが自分史の指導に繋がった。抱えている不満を吐き出す術がなくストレスになっていた子どもも、不満を思いっきり書く経験を終えると、客観的に自分を見つめ直し、浄化する機会となった。無目標だった楽しみの中から何かしたいことを探し出す子どももいた。

5.2. 暗誦と書き出しで課題解決へ

学習のやり直しの必要な子どもたちはそれを必要だと自覚するまでは、決して取り組もうとしない。しかし、自分史を暗誦し、清書する段階では、学び直す必要を自ら自覚できるケースが多い。

6. 課題作文

日記に飽きた子どもには考える楽しさが加わる課題作文が適していた。具体的な身近な題材で、簡単な結論への導き方や起承転結等の書き方を指導し書かせる。子ども達が自ら題材を選び、書きたいことを明確にすると、要点整理に繋がる。これは読解時にも要点把握に繋がった。

7. 結果と考察

①必要な指導を絞りやすい作文分析、②自らを語る機会を内省に繋げ、目標や希望に導く機会とする自分史、③覚えやすい自分の言葉で書き留め、復唱することで日本語で話す・書くことへの抵抗を減らし、日本語文の特徴を掴める自分史の応用④要点を考える力が付き、聞き取りやすい発話を生み出す課題作文、これらは教授型の授業で得られない子どもの内面に迫り信頼関係を深め、聞き流しに終わらず、書き留めることで子どもも指導者も力量向上できる有効な手立てだと分かった。真実の声の作文は子どもが自ら学習に取り組もうとする姿勢に変え得る教材だと言える。